

令和4年 12月8日

福生市議会議長 清水 義朋 様

総務文教委員会委員長 山崎 貴裕

令和4年度 福生市議会総務文教委員会視察報告書

本委員会は、令和4年度行政視察を次のとおり実施しましたので、報告いたします。

1. 視察日程

令和4年 10月 24日(月)～25日(火)

2. 視察先及び目的

- (1) 兵庫県小野市  
小中一貫教育の取り組みについて
- (2) 兵庫県姫路市  
小中一貫教育の取り組みについて

3. 視察参加者

委員長	山崎 貴裕
副委員長	三原 智子
委員	小林 貢
委員	佐藤 弘治
委員	青木 健
委員	池田 公三
委員	武藤 政義
随 行	大村 貴子(議会事務局)

●兵庫県小野市 視察 【10月 24日(月)】

1. 市の概要(令和4年3月 31日現在)

- (1) 面積 93.84 平方キロメートル
- (2) 人口 47,561 人

- (3) 世帯数 20,383 世帯  
(4) 概要 小野市は、兵庫県東播磨地域のほぼ中央に位置している。昭和 29 年 12 月 1 日に市制が施行され、古くからそろばんと家庭用刃物の生産地として発展してきた。今後も、東播磨の中心都市として更なる飛躍を遂げようとしている。

## 2. 視察目的

キャリア形成を意識し、地域に根差した小中一貫教育の推進と、「脳科学」を取り入れ、脳の発達に応じた学びの工夫による小中一貫教育を推進している。これらの取り組みを学び、これからの福生市の学校の在り方を考える上での参考とすることを目的とした。

## 3. 調査項目

### (1) 事業を行うに至った経緯について

脳科学の観点から、乳児期に大きく成長する脳は、小学校高学年に再び急成長するといわれている。この脳が急成長する時期に、脳の成長に応じた学びの一貫性が大切であることから小中一貫校の設置に至った。

### (2) 事業概要について

平成 16 年から小中連携教育に取り組む。8校ある小学校、4校ある中学校を4つの中学校区に分け、平成 28 年に市内全校区において小中一貫教育校となる。

学びのつながりを重視し、児童・生徒の自立を目指している。また、キャリア形成を意識して、地域に根差した小中一貫教育を推進し、市の教育振興計画でうたわれている基本理念「国際社会の中でたくましく活躍できる心豊かで自立した人づくり」が行われている。

### (3) 事業の特色について

平成 17 年 10 月に東北大学の川島隆太教授が小野市教育行政顧問に就任した。同教授は、「脳の司令塔である前頭前野を鍛えることは、生きる力を育み、こころの教育につながる」と提唱。前頭前野が成長する3歳までと10歳からに着目し、脳の発達の時期と学習内容の高度化に対応した教育を行っている。そして、9年を5年と4年に分け、小学校へ通うのは5年生までとし、6年生からは中学校へ通い教科担任制を敷いている。各中学校区では、それぞれの実態と特色を生かした共通の教育目標、一貫したカリキュラムが作成されている。

### (4) 学校現場視察

河合中学校区の河合中学校を視察した。この中学校区は、1つの小学校と1つの

中学校から形成されており、それぞれの校舎は約 600 メートル離れている。制服は小中別で、小学生は徒歩、中学生は自転車通学が可能とのこと。小学6年生も教科担任制で、授業時間も 50 分と中学生と同じとなっている。



河合中学校の会議室にて、小野市教育委員会職員、河合中学校長等から説明を受ける。

#### (5) その他

小野市の教育は「夢と希望の教育」と題し、超スマート社会(Society5.0)を豊かに生きる力を育む 自立して未来をひらく人づくりを推進している。前出の川島教授により脳科学の考えが取り入れられており、脳の前頭前野を健康に育てることは、子供たちを健全に育むことにつながるという研究結果から、いろいろな事業が行われている。

重点施策の一つに「おの検定」がある。基礎学力の定着、主体的な学び、家庭学習の習慣化のための学力検定では、市独自のテキストや家庭学習の手引きなども作成されている。成果としては、平成 19 年～令和3年度の全国学力・学習調査において、基礎的な国語の力が身につけていて、算数・数学では基本的技能の習得が良好といった結果がでている。また、コミュニケーション能力、規範意識や社会性の向上にも役立っているとのこと。さらに、「おの検定」では、小学校用に「なわとび検定」「水泳検定」、中学校用に「体力検定」も行われている。

他に特筆されるのは、母親のおなかに命が宿る0歳から 15 歳までの 16 年間の脳の発達にとって重要な時期ととらえ、それぞれの脳の成長に応じた教育を展開していることがあげられる。幼保小の連携もされており、就学前教育、義務教育第一期(小1～小4)、第二期(小5～中1)、第三期(中2～中3)ごとの「学び」が具体的に示され 15 歳の姿を共有し、一貫した系統的な「学び」が確立されている。

#### 4. 所感

小野市の教育においては、同市教育行政顧問の東北大学の川島隆太教授が提唱する「脳科学」の影響が非常に大きいと感じた。脳を健全に育てるには、「あたたかな家庭」、「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」が重要であることから、それぞれ

エビデンスに基づいた取り組みが市全体で行われている様子が伝わった。

そのためには、0歳～15歳までの脳の成長に合わせた継続かつ一貫した教育が重要であると認識されており、その中に今回視察目的とした「小中一貫校」の展開が位置付けられている。小学6年生のまま中学校の校舎で学び、教科担任制を経験することにより小学校から中学校へのゆるやかな接続ができていて、いわゆる中1ギャップが軽減されていることも聞くことができた。

小野市の教員は、基本的に退職まで小野市の学校での勤務となり配置転換も市内の学校となるとのことである。東京都にはないこの仕組みには非常に驚かされた。この仕組みは、市の教育方針への理解やベクトル合わせにも有効であり、つながりを意識した一貫校設置には大きな力となっていると言えるのではないかと。

河合中学校正面玄関にて  
参加委員7名



## ●兵庫県姫路市 視察【10月25日(火)】

### 1. 市の概要(令和4年4月1日現在)

- (1) 面積 534.35 平方キロメートル
- (2) 人口 525,365 人
- (3) 世帯数 225,755 世帯
- (4) 概要 姫路市は、明治22年の市制施行以来、商工業都市として発展してきた。平成8年には中核都市に移行し、平成26年には地方中枢拠点都市(現:連携中枢都市)のモデル都市に選定され、播磨圏域全体の経済成長の牽引、高次都市機能の集積などに取り組んでいる。瀬戸内海臨海部には重厚長大型企業が立地しており、さらなる企業誘致や企業立地の推進がなされている。  
また、平成5年に日本では初の世界文化遺産に指定された姫路城や書写山圓教寺などの歴史的建造物や文化遺産も多く有している。  
さらに、令和3年5月には内閣府から「SDGs 未来都市」に選定され、姫路城のライトアップのLED照明化を推進するなど、持続可能で安心して暮らせることのできる都市を目指している。

## 2. 視察目的

姫路市は、先進的に小中一貫校化に取り組んできた。校舎一体型、施設分離型、同一敷地内施設隣接型といくつかのタイプの義務教育学校も展開されている。福生市でも将来における小中一貫校が検討されていることから、参考となるべきことが多くあるのではないかと選定に至った。

## 3. 調査項目

### (1) 事業を行うに至った経緯について

姫路市の調査により、小中学生の問題行動(いじめ、不登校)件数は、中学校1年生で急増するというデータが得られた。また、教科等の好き嫌い調査では、中学1年生で「好き」の割合が下がってしまうこともわかった。さらに、教職員の意識においても子供の育ちや学びをつなげる視点の弱さや各学校の中だけで考える風土があった。子供の心身の発育の加速化と現行の学校制度がうまくかみ合っていないのではないかと、子供の成長は連続しているのに教える側の意識はうまくつながっていないのではないかとという背景が小中一貫教育の導入の要因になっている。

### (2) 事業概要について

姫路市では、中1ギャップの解消をきっかけに「学力向上」と「人間関係力の育成」を目指し、市内全35のブロック(中学校区・義務教育学校区)で小中一貫教育が進められている。

小中一貫教育を、

- ①小中共通の教育目標・目指す子供像の設定
  - ②9年間を見通した一貫した指導
  - ③小中教職員・保護者・地域住民による協働実践
- という3つの要素を満たした教育活動であると定義している。

市内には小学校66校、中学校32校、義務教育学校3校、特別支援学校(市立)1校、市立高等学校3校と非常に多くの学校が存在する。義務教育学校設置にあたっては、35の中学校区の中から、1小学校1中学校により構成されている8中学校区からの「公募」により、3中学校区が設置されている。平成30年度に施設隣接型の白鷺小中学校(市立白鷺小学校、市立白鷺中学校)が、平成31年度には施設分離型の四郷学院(市立四郷小学校、市立四郷中学校)が、令和2年度には施設一体型の豊富小中学校(市立豊富小学校、市立豊富中学校)が設置された。



姫路市役所  
議会会議室  
にて説明を  
聞く各委員

### (3) 沿革

#### 【ファーストステージ】

- ◎平成 19 年度・・・「魅力ある姫路の教育創造プログラム」に事業構想位置付け
- ◎平成 19 年 7 月・・・白鷺中学ブロックを小中一貫教育推進モデルブロックに指定
- ◎平成 21 年 1 月・・・姫路市小中一貫教育標準カリキュラム策定
- ◎平成 21 年 4 月・・・白鷺中学校ブロックモデル実践（1 中 1 小施設隣接型）開始
- ◎平成 23 年 4 月・・・「小中一貫教育全市展開  
広嶺中学校ブロックモデル実践（1 中複数小施設分離型）開始
- ◎平成 26 年 10 月・・・小中一貫教育全国サミット in 姫路開催  
授業公開：広嶺、白鷺、四郷、東　発表：書写、安富
- ◎平成 28 年 8 月・・・新しい学校の種類である義務教育学校公募
- ◎平成 29 年 4 月・・・姫路コミュニティ・スクール（白鷺・豊富・四郷中学校ブロッ  
ク）に指定し、新制度（義務教育学校 9 についての検討開始
- ◎平成 29 年 12 月・・・「姫路市立学校条例」等の改正
- ◎平成 30 年 4 月・・・姫路市立白鷺小中学校（義務教育学校）開校

#### 【セカンドステージ】

- ◎平成 30 年度～　ファーストステージを検証し、発展期へ

#### ①ファーストステージの検証

##### ・教職員の意識の変化

小中一貫教育は大切だと考える教職員の割合における肯定的回答は、平成 24 年の約 81 パーセントから 83 パーセントへ増え、学年や校種の枠を超えて連携を図ろうとする教職員の割合も、小中平均で平成 24 年度の約 65 パーセントから平成 29 年度の約 81 パーセントへと上昇している。

・子供の学習意欲の向上

学校の勉強がわかると答える児童・生徒の割合では、小中平均でみると平成 24 年度の 76 パーセントから平成 29 年度には約 82 パーセントへと上昇している。

・自尊心の高まり

全国学力・学習状況調査での正答率は大きな変化はないが、自分には良いところがあると答えた児童・生徒は、一貫教育導入前に比べて上昇、特に中学生では9.4ポイントと大きな上昇がみられた。

・成果を支えたもの

導入時は、小学校と中学校の教職員が協議するときによそよそしさがあったが、しだいに自然と話が弾むようになった。これこそが9年間の最大の成果であると捉えた。導入からの9年間で、どの中学校ブロックでも、小学生と中学生の学校行事を通じた交流や、教職員の協働など小中一貫教育の日常化が進んだことで、多くの成果がでていいる。

②セカンドステージについて

ファーストステージでは検証結果は良好であったが、教職員、保護者、地域の方々から小中一貫教育の成果が見えにくいとの声も上がっているようだ。それは、ブロックごとにどのような子供の姿を目指しているのかという具体的な指標設定が行われていなかったことが要因のようで、「取り組みに対する明確な指標とそれを検証するための手段」を明らかにし、PDCA サイクルの手法を取り入れて小中一貫教育が推進されている。



▲姫路市教育委員会職員からの座学  
(教育委員会職員による説明)



▲粋なおもてなしでした

(4) 事業の特色について

姫路市では、小中一貫校(義務教育学校)というスタイルは3校のみであるが、予測困難な社会の変化に対応し、「未来を切り拓く子供たちを保護者や地域の人々と共に育みたい!」という思いのもと、ブロック(中学校区・義務教育学校区)の実態や、地域の特性・特色に応じて35ブロックそれぞれの小中一貫教育がなされている。

各ブロックには「小中共通の教育目標」がたてられ、「目指す子供像」を設定し、どのような教育活動を進めるかという全体計画「グランドデザイン」が作成され、それを

具現化した特色あるカリキュラム(ブランドカリキュラム)のもと一貫教育の取り組みが推進されている。ベースには姫路市教育振興基本計画があるが、各中学ブロックのオリジナリティがより鮮明に反映された教育がなされている。

#### ・豊富小中学校のグランドデザインとブランドカリキュラム

##### 【グランドデザイン】

- ・ 目指す学校像  
あいさつと笑顔あふれる地域の学校
- ・ 学校教育目標  
変動する社会の中で自己を実現できる人材の育成
- ・ めざす子ども像  
豊かな感性を持ち、知恵を活かして課題や場面に対応できる子

##### 【ブランドカリキュラム】

- ・ 豊かな体験活動の推進
- ・ 情報活用能力の育成
- ・ 学校図書館の機能向上
- ・ NIE（教育に新聞を）
- ・ 食育の推進
- ・ 特別支援教育の推進
- ・ 道徳・人権教育の推進
- ・ 防災教育の推進
- ・ 健康サイクルとよとみ
- ・ とよとみ学校応援団
- ・ SDGs の推進

#### ・白鷺小中学校のグランドデザイン

- ・ 学校教育目標  
確かな学力を中核とした総合的な人間力の育成
- ・ 育成を目指す姿  
自ら学びを「探求」的につくり上げる子  
見通しをもち、失敗をおそれずに挑戦し、あきらめずにがんばり抜く子  
自他を大切にしながら自分の役割を果たし、社会を形成する子

#### (5) その他

教職員の配置については、小野市同様で、姫路市に配属された教員は定年まで姫路市内の学校への配置となる。最長9年で異動となり、他市町村への異動希望がない限り、姫路市内から外へ出ていくことはないとのこと。これは、姫路市の教育を推進していくにあたり大きなプラス要因となっていると思われる。

各ブロックの「目指す子供像」の具現化には、保護者・地域住民との協働があげられている。小中一貫教育の取り組みの推進には、教職員だけでなく、保護者・地域住民の理解、協力が必要不可欠であるということが鮮明となっている。家庭での生活は、学校、地域、社会へとつながるものという考えから、生活習慣や学習習慣を家庭でしっかりと身に付けさせる必要があるとしている。また、子供たちは、将来の地域の



担い手であるため、地域の中で多様な学びと交流・体験をすることで豊かな人間へ成長していくことが認識されている。

#### 4. 所感

35の中学校ごとのブロックがあること、その数の多さにまずもって驚いた。福生市の約10倍である。そこで、学校や地域の実態に応じた「目指す子供像」の実現に向け、9年間の系統性を確保した教育課程(ブランドカリキュラム)が作成され、教育が展開されている。これを推進するためのカギとなっているのは、教員の配置方法が好影響となっていることを強く感じた。姫路市の教育イコール小中一貫教育であることをはじめからわかっている教員が配属される。そして、異動希望を出さない限り、市外の学校へ配属されることはない。つまり、小中一貫教育ありきの姫路市の教育に対し、違った考えの教員の存在がほとんどないといったことは、目標達成への大きな力となっていることであろう。東京都では、配属後一つの区市町村で教員生活を終えることはないようである。福生市において小中一貫教育がなされる場合の教員配置へのヒントになって欲しい。

各ブロックの教育目標作成には、地域の住民の影響が大きい。それは福生市に比べて50倍以上の行政面積をもっていることから、それぞれのブロックには異なった地域の特性が存在していることも理解できた。市の教育目標を落とし込んだ地域別の教育目標、「目指す子供像」の実現に学校、家庭、地域が一体となって取り組んでいることが大きな特徴で、コンパクトシティではあるが、福生市でも大いに参考になると感じた。